

# ソーシャル・キャピタル醸成のための課外授業 とまちづくり事業との連携方策 ―日向市立富高小学校のまちづくり課外授業の 関係者が形成するネットワークに着目して―

辻 喜彦<sup>1</sup>・吉武 哲信<sup>2</sup>・出口 近士<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 学生員 宮崎大学農学工学総合研究科博士後期課程 (E-mail:y-tsuji@atelier74.co.jp)

<sup>2</sup> 正会員 博(工) 宮崎大学工学部土木環境工学科 (宮崎県宮崎市学園木花台西1丁目1番地,  
E-mail:t.yoshi@cc.miyazaki-u.ac.jp)

<sup>3</sup> 正会員 工博 宮崎大学工学部土木環境工学科 (宮崎県宮崎市学園木花台西1丁目1番地,  
E-mail:deguchi@cc.miyazaki-u.ac.jp)

地方都市においては、地域資産を磨き、地域力を再生させる良質な社会資本整備の在り方が求められている。また市民の自発的活動によって信頼関係やネットワークを醸成し、次世代へと継承することも地域再生の重要な要因であると指摘されている。しかし、高質なインフラ整備を契機として市民活動が誘発、育成された実践例および研究論文はまだ少なく、その有効性について検証されていない。

本研究においては、日向市駅周辺地区のまちづくり事業の進捗に合わせて富高小学校で開催されたまちづくり課外授業を事例として、課外授業関係者が人的ネットワークを形成し、市民の主体的な活動を促した参画プロセス、その後のまちづくり事業との関わり方等について検証した。

**キーワード:** まちづくり学習, 社会的共有資本, 市民協働

## 1. 研究の背景と目的

持続性のあるまちづくりを進めていく上で、計画段階からの市民参画が地域力再生の大きな原動力になるとされ、ワークショップや勉強会等の取り組みが全国で積極的展開されている<sup>1)2)</sup>。梶島<sup>3)</sup>、中川<sup>4)</sup>、倉原<sup>5)</sup>らは、そのための有効な手法として、次世代を担う子ども達が街に関心を持つためのまちづくり学習が重要な役割を果たしていることを明らかにしている。

一方で、社会的共有資本<sup>6)</sup>としてのインフラ整備は、エンドユーザーである市民が愛着と誇りを持ち、人的ネットワークによって利用管理してもらうことが最終目標であり、それをソーシャル・キャピタルの醸成へと結びつけていくことが大きな課題となっている<sup>7)</sup>。

しかしながら、実際のまちづくり事業とまちづくり学習とが直接連携する機会は少ない<sup>8)</sup>。したがって、まちづくり学習に関わった子ども達や大人達によって形成されるネットワークがソーシャル・キャピタルの育成に有効であることを明らかにするためには、学習成果がまちづくり事業と連携することを明確化し、またその評価を行うことが必要と考えられる。

以上の認識から、本研究は、まちづくり学習(課外授業)を契機としてまちづくり事業に関する大人達(授業関係者)の人的ネットワークの形成過程を追跡し、その有効性を検討するものである。具体的には、宮崎県日向市立富高小学校の課外授業の取り組みを取り上げ、以下の点に着目して調査・分析するものである。

- 1) 課外授業プロセスの追跡整理による関係者の関わり方と意識変化
- 2) 課外授業関係者が形成するネットワークの拡がり方

## 2. 調査・分析の枠組み

本稿では、「課外授業」における学習プロセスと関係者の参加方法の分析に基づいて、上記1) 2) 3) の検討を行うものであり、分析に用いるデータ・資料は以下の通りである。

- ① 富高小学校におけるまちづくり課外授業の開催プロセス<sup>10)</sup>,
- ② 講師達の発話を集めた議事録やメモ、記録報告書<sup>11)</sup>
- ③ 授業終了後に関係者(講師4人、市役所担当職員4人、市民

グループ2団体)に実施したヒアリング<sup>11)</sup>,

⑤市民による活動やイベント開催および参加者推移<sup>12)</sup>,

上記を第1次データとして,1) 課外授業を時系列に整理し直すことで学習プログラム全体像を把握し,明確化する。次いで,2) 関係者の課外授業への参加の仕方を明らかにし,授業終了後に起こしたアクションを整理する。

### 3. 研究対象の概要

#### (1) 日向市におけるまちづくり事業の概要

宮崎県日向市では,1996年より中心市街地の魅力とにぎわい再生を図るために,官民協働のまちづくりを基本理念とし,JR日豊本線日向市駅連続立体交差事業(宮崎県)・日向市駅周辺地区土地区画整理事業(日向市)・特定商業集積整備事業(民間)の一体的整備に連携して取り組んでいる。また,宮崎県は2001年以降,生産量の連続日本一を誇る杉生産地であり,林業の活性化は地域の活性化にも繋がるため,県域全体で木材の利用拡大を図っているところである。そのため日向市でも「木の香りあふれるまちづくり」をテーマとし,まちづくりが進められている<sup>13)</sup>。

#### (2) まちづくり課外授業の概要

日向市立富高小学校では,過去に計2回,実際のまちづくり事業の進捗と連動してまちづくり課外授業を開催している。

##### a) 第1回まちづくり課外授業(2002年度)

まちづくり事業主体である宮崎県と日向市では,現在取り組んでいるまちづくりを次世代へ繋げていくために,その担い手となる子どもたちが街に関心を持つことが大切と考え,まちづくり学習をその契機のひとつとして活用することが期待された。

開催期間:2002年9月~2002年10月(約2ヶ月・10時間)

対象児童:日向市立富高小学校6年生3クラス(児童95人)

授業テーマ:「10年後の日向・・・そして私」

授業主催者等:宮崎県土木部都市計画課・日向市市街地整備課,富高小学校

講師:日向地区都市デザイン会議メンバー・篠原修教授(現政策研究大学院大学),内藤廣教授(東京大学)ら

授業内容:児童たちが街なかを調査し,将来の街のイメージを考え,模型を製作する課外授業を開催した。

本授業は,まちづくり学習の新しい取り組みとして地元新聞2紙で取り上げられ,地域に大きな反響を呼んだ<sup>13)</sup>。

##### b) 第2回まちづくり課外授業(2004年度)

第1回授業が好評だったため,2年後(2004年)に再度,好評だった課外授業を開催することを宮崎県及び日向市の

事業担当関係者が企画した。関係者は,変貌し始めた駅周辺のまちづくりに関心を持ってもらうことを考えた。一方,富高小学校の関係者は,児童自らが街に対して欲しい店舗や利用客のことを考えて,夢を描き,それをカタチにデザインし,モノに作りあげ,その夢を実現するというプロセスを体験することによって成長することを期待した。また,まちづくりに関与するプランナーやデザイナーらは,児童たちから新鮮な発想を逆に返してもらうことを期待していた。このような背景から以下に示すような「日向市活性化塾」が開催されることになった<sup>14)</sup>。

開催期間:2004年10月~2005年1月(約4ヶ月・40時間)

対象児童:日向市立富高小学校6年生3クラス(児童91人)

授業テーマ:「日向市活性化塾(移動式夢空間)」

授業主催者等:主催者(企画関係者)は宮崎県土木部都市計画課・日向市市街地整備課,富高小学校で,後援(運営関係者)は日向木の芽会,地元職方である<sup>11)</sup>。

講師:日向市まちづくり事業において,杉材を利活用したストリートファニチャー(街路灯,パーゴラ,ベンチ等)のデザイン・製作を担当している南雲勝志氏(IDデザイナー)らデザイナー3名<sup>11)</sup>,前回講師の篠原,内藤両教授らも特別講師として参加した。

授業内容:駅前空間や祭り,イベントなどで,自分たちと街の人たちが一緒に楽しくふれあえ多目的利活用できる「杉でつくる移動式屋台」を考え,模型及び実物を製作し,下級生,父兄等を招いて発表会を開催した。

第2回授業も大きな反響を呼び,「活性化塾」の一連の活動は,2005年「グッドデザイン賞(新領域デザイン部門)」を受賞し,移動式屋台は,日向市に寄贈され,現在もイベント等の際に市民が利活用している。

##### c) 第3回まちづくり課外授業(2007年度)

前年暮れに新日向市駅が開業した2007年度においては,宮崎県や日向市の行政関係者は,東西駅前広場の完成する時期(2007年度末)に目標を設定し,子ども達が駅周辺のまちづくりへの関心を持ち,街への愛着を育んでいくことを考え,課外授業を企画,開催した。

開催期間:2007年12月~2008年3月(約4ヶ月・12時間)

対象児童:日向市立富高小学校6年生3クラス(99人)

活動テーマ:「タイムカプセル・プロジェクト」

授業主催者等:主催者(企画関係者)は宮崎県土木部都市計画課・日向市市街地整備課,富高小学校で,後援(運営関係者)は日向木の芽会,駅前広場担当工事会社である<sup>11)</sup>。

講師:第2回授業で講師を務めた南雲勝志氏(IDデザイナー)らデザイナー3名<sup>10)</sup>に小野寺康氏(都市設計家)が加わった。

授業内容:子ども達が見る夢をカタチにするとともに,街の中に夢を埋め込み,その夢を市民みんなで受け継い

でいくことを目標として、日向特産の「基石」「蛤」に子ども達の将来の夢や街への想いを込めて、自らがデザインし、絵の具等で表現する。夢のテーマをみんなで考え、チームで制作した。最終的には作品をタイムカプセルに詰め込み、日向市駅西口駅前広場完成に合わせ広場ロータリー下に埋設し、子ども達が成人式を迎える2016年に開封する。また同時に子ども達の作品とともに一般市民からも「未来への手紙」を募集、埋設し市勢70周年(2021年)に発送する。

「未来への手紙」は、市担当職員の予想を大きく上回り、964通もの手紙が届けられ、完成式でのタイムカプセル埋設式には多くの市民が参加している。

## (2) 課外授業における関係者の参加プロセス

計3回の授業の内容を時系列に整理すると表-1のようになる。課外授業に関わった大人達(関係者)は、表-1にまとめたように、回数を経るごとに多様な関わり方や展開を示している。ただし、具体的な人的ネットワーク拡大の分析については、講演時に発表する。

表-1. 課外授業関係者の参加プロセスと参加リスト

	関係者	学習内容
第1回授業	小学校担任教師	準備学習での街なか調査指導 授業運営にあたり行政側との調整
	行政担当者(県・市)	授業企画立案、運営、記録作成 模型製作の素材提供、技術指導、
	講師	子ども達へのメッセージ 計画に対するアドバイス指導等
第2回授業	小学校担任教師	第1回授業後、出前講座等の開催 授業運営にあたり行政側との調整
	行政担当者(県・市)	授業企画立案、運営、記録作成 まちづくり事業の説明、解説
	講師	授業運営、計画案へのアドバイス 計画案の実施設計デザイン等 授業後、全国へのPR
	木材関係者	材料提供、製作指導、仕上げ等 杉コレクションの企画、開催 授業後、全国へのPR
第3回授業	小学校担任教師	授業運営にあたり行政側との調整 街なか調査の指導、アドバイス等
	行政担当者(県・市)	授業企画立案、運営、記録作成 街なか調査等の引率、説明等 未来への手紙企画、運営、準備
	講師	授業運営、計画案へのアドバイス 計画案の実施設計デザイン等 授業成果の市民への発表企画
	木材関係者 工事関係者	素材提供、 「作品発表会」舞台設営 杉コレクションの県内展開、PR

## 4. 関係者によるネットワークの形成

### a) 担任教師の関わり方

第2回、第3回授業時の担任教師へのヒアリングに基づく、第1回授業がどちらかというと行政主導型だったのに対して、2回目以降は、他の関係者の働きかけもあり、各回の授業内容や運営により深く関わるようになった。特に教師たちは、第1回課外授業開催後、高学年による福祉(バリアフリー)や社会(商店街)の授業の中で、街なかへの体験や出前講座などを計画し実施するようになり、教師自身もまちづくりへの関心を高めたことがうかがえる。

### b) 講師の関わり方

講師へのヒアリングに基づく、第2回授業での子ども達と直接接する時間が長かったことが強い印象を与えている。そして、各授業ともモノづくり(作品制作)というプロセスについては、子ども達の発想の豊かさ、力強さを受け取っていると述べている<sup>11)</sup>。このことが専門家としての自らの意識を高め、モノづくりや公共空間づくりを通じて街に「お返し」することの重要性を日向市や県内のみならず全国(たとえば日本全国杉ダラケ倶楽部の活動<sup>14)</sup>など)へ情報発信する契機となった。

### c) 行政担当者の関わり方

県・市担当職員は課外授業を運営する上で、側面から開催準備を支援し、小学校・講師・地域関係者・市民を結びつける重要な役割を果たしてきた。彼らへのヒアリングに基づく、第1回授業の当初は、大きな期待を持たない授業内容がイメージされていた。しかし、子ども達が模型等によって描いた夢には、感受性豊かな表現や街への多くの想いが込められていたことに感動している。そして児童、講師、教師、関係者がともに妥協のない「モノ」を作ろうとする姿勢にまちづくりの本質を見出したと述べている。

参加者、関係者の拡大については、表-1に示した経緯を辿ると、授業関係者→木材関係者→商業関係者→市民へとその輪が広がっていることがわかる。特に市民も参加できる「未来への手紙」企画は、東西駅前広場完成の時期をターゲットにして、新たな社会的共有資本である駅前広場を市民の身近な存在にするために戦略的な工夫を練ったものである。「未来への手紙」という媒介を通じることによって、駅前広場という公共空間の持つ役割や存在を市民にとってより身近なものにすることを市担当職員は期待していたと述べている。

### d) 木材関係者の関わり方

2004年度に開催された第2回課外授業から参画し、その後の日向のまちづくり事業に大きな貢献を果たしているのが木材関係者の組織「日向木の芽会」である。

「木を活かしたまちづくり」を具現化するための媒介

となった「異動式夢空間」は、そのデザインオリティの高さだけでなく、「杉」という地域素材を通じて行政、専門家、デザイナー、商業者、市民そして子ども達を結びつける役割を果たしており<sup>13)</sup>、そのサポート役を果たしてきたのが、「木の芽会」である。しかし、課外授業は、単一組織としての「木の芽会」だけでは成し得なかった人的ネットワークを市民レベルにまで浸透させたといえ、ソーシャル・キャピタル醸成の観点からは重要であろう。その後のまちづくり事業の進捗に伴い、課外授業をサポートしてきた「日向木の芽会」等が中心的に活動を展開するようになり、市民主体の各種イベントや祭りも企画、開催されるようになってきている。これらのイベント等は年々開催回数ならびに参加者数も増加傾向にある。また、まちづくり事業の進捗に伴い、市民主体の各種イベントやお祭りも企画、開催されており、年々開催回数ならびに参加者数も増加傾向にある(図-1)。以上は、課外授業の成果に限ったものではなく、シンポジウムやワークショップ等の開催の積み重ねによって、次第に市民意識が向上し、「街を育てる」「街を使う」ことが恒常化しつつあることを示している。

さらに、これまでの課外授業の取り組み成果を受ける形で2007年には地元NPOが中心となったまちづくり活動組織「こども街育て隊」が結成され、街の清掃活動やイベントでの屋台出店等を行うようになった(表-2)。

小学校側における街なか体験や出前講座などの実施によって、課外授業受講者以外の子供達の中にも街に対して社会参加する意識が根付いてきているものと考えられ、彼らの中の数々が清掃活動等に参加していると市担当職員は述べている<sup>14)</sup>。

## 6. 考察とまとめ

子ども達が体験したデザイン・モノづくりのプロセスに接することで大人達関係者が今後のコミュニケーション形成に与える効果、まちづくり(ソーシャル・キャピタル醸成)の連携方策について考察する。

計3回にわたる課外授業において、子ども達が体験した学習プロセスは、子ども達に、協力の大切さ・夢の実現・感謝の気持ちなどを育むとともに、関係する大人達にも子ども達と同じ時間を共有することで意識変化が生まれている。このことは、参加型のまちづくりの一環として課外授業を開催する場合には、父兄や地域住民、地域団体を始めとする授業関係者が子ども達とまちづくりに関する楽しい経験を共有することが重要なポイントであることを示唆している。インフラ整備などの公共事業は、本来、事業完成が目標ではなく、それを契機として社会的共有資本を育み、継承し

ていくコミュニケーション力の再生(ソーシャル・キャピタル醸成)が最終目標化される必要がある。このことから日向市において課外授業を通じて、子ども達のみならず、専門家・教育者・行政・木材関係者・商業者・市民へと輪を上げた交流ネットワークの展開は、今後のまちづくりの原動力として有効に働くものと考えられる。したがって、今後のまちづくりにおいては、インフラ整備としての公共事業の進捗に併せ、それらに関わる行政(教師)と住民や市民(児童)の関係に加えて、専門家、民間関係者の協力、ネットワーク関係を築き、連携していくことを総合的かつ戦略的に展開し、マネジメントしていくことが重要であるといえる。

表-2 「まち育て隊」活動イベント参加状況

開催日時	参加イベント	主な活動内容	イベント参加者
2005. 9. 17-18	十五夜まつり	アンケート調査	約 3,000 人
2005. 11. 13	街区周年祭	アンケート調査	約 600 人
2006. 9. 9-10	十五夜まつり	昔の日向市写真展	約 4,000 人
2006. 12. 17	新規開業イベント	感謝メッセージ徴収	約 15,000 人
2007. 2. 24	旧駅お別れイベント	ぜんざいのふるまい	約 2,000 人
2007. 9. 23	十五夜まつり	※グッズ販売	約 1,000 人
2007. 10. 27	まちなかハロウィン	※こどもカフェ・劇	約 3,000 人
2007. 12. 16	新規開業1周年イベント	※こどもカフェ・劇	約 8,000 人
2008. 3. 9	西口駅前広場完成イベント	※こどもカフェ	約 5,000 人

(※は、「こどもまち育て隊」発足以降の活動)

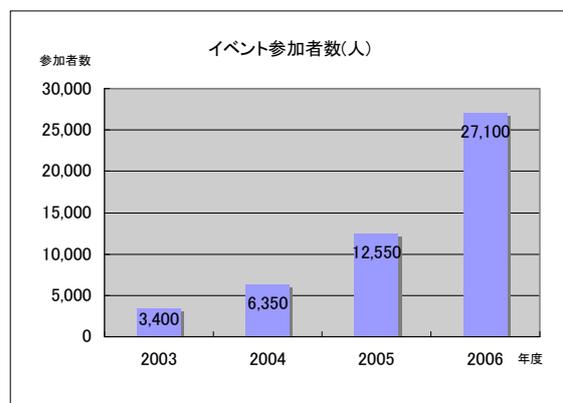


図-1 イベント参加者数の推移(日向市調査)

## 参考文献

- 1) 日本建築学会編: まちづくり学習, 丸善, 2004.
- 2) 西村幸夫編: まちづくり学, 朝倉書店, 2007.
- 3) 梶島邦江・梅澤隆: こどものまちづくり学習教材としての「まちの謎解きブック」の有用性に関する研究, 都市計画論文集, No.28, pp163-168, 1996.
- 4) 三輪千夏・中川義英ほか: こどものまちづくり学習支援体制開発のための一考察, 土木学会年次学術講演会講演概要集, No.53, pp.194-195, 1998
- 5) 倉原孝孝: 子どもたちの体験的・持続的まちづくり活動の意義と評価, 日本建築学会技術報告集, No.12, pp199-504, 2001.
- 6) 宇沢弘文編: 社会的共有資本, 岩波書店, 2000.
- 7) 篠原修: 連載 後世に何を残せるか, 積算資料, 2006年7-12月, 経済調査会, 2006.
- 8) 内閣府経済社会総合研究所: コミュニティ機能再生とソーシ

- ヤル・キャピタルに関する研究調査報告書,2005年8月,2005.
- 9) 篠部裕: 地域社会と連携した小学校でのまちづくり学習に関する研究,都市計画論文集, No.43-3, pp.499-204, 2005.
  - 10) 日本全国スギダラケ倶楽部宮崎支部HP: タイムカプセル 課外授業レポート,2008年.
  - 11) 日向市: 景観マネジメント業務報告書,2008.
  - 12) 宮崎県: 日向地区都市デザイン会議報告書,2008.
  - 13) 内藤廣: 杉で何ができるかー 日向市での試みー, 林経協季報「杣径」, No.2, pp.17-21, (社)日本林業経営者協会,2006.
  - 14) 月刊「杉」WEB版: WCIE2008特集,2008年4月.
  - 15) 長町美和子ほか: 杉とゆく懐かしい未来, コンフォルト, 2005年4月, No.83, pp.-07-17, 建築資料研究社,2005.